記者手帳

連載「風化させない」を終えて

「被爆者の思い」託される

「広島のために何かできることはありますか」。広島市が主催するジャーナリスト研修で、共に参加していた地方紙の記者が、平和活動に取り組む女子学生にこんな言葉を掛けた。学生は、森長蓉子さん(22)。身近な幸せを影絵にして平和を考えてもらう「小さな祈りの影絵展」を企画する会の代表だ。

森長さんはこう言った。

「特別なことはしなくていいんです。原爆が落とされたのは広島だけど、戦争の被害は日本中であった。一緒に平和を作り上げることが大切ではないでしょうか」。私も同じ20代。若者の戦争や平和への意識が希薄だと言われる中、原爆の記憶、平和の尊さを懸命に訴える姿を見て考えさせられた。「自分はどれだけの思いを持っているだろうか」

戦後71年がたち、広島では「風化させない」ための取り組みが進んでいた。ただ、全国各地では風化が加速しているとみられる。平和を考えるべきなのは、原爆が落とされた広島や長崎だけではないはずだ。徳島でも大空襲で甚大な被害を受けたほか、3万4千人の県人が戦地で命を落としたことを忘れてはならない。

被爆者たちは骨身を削って、日本中、世界中を回って核なき世界を、戦争の凄惨さを、訴えてきた。彼らの平均年齢は80歳を超えている。8歳で被爆し、語り部として各地を飛び回ってきた岡田恵美子さん(79)の言葉が心に残る。「もう今はあなたたちの時代でしょ」。重要なバトンを託されたような気がした。

(鳴門支局・大城咲)